Title:「ちょっとそこまで。」

山本 友来
静岡のど田舎で生まれ、栃木、新潟、埼玉で人格を形成し、京都で青春を過ごしたのち、中国の武漢という街で修行を積みました。2007年より再び学生に。懲りずにちょっくら出かけてきます。

最近のエントリー

- マレーシア再び。147～163/183 (8月13～ 29日) (2009.08.31)
- こちら側、あちら側。141～144/183 (8月7～10日) (2009.08.18)
- 「おばちゃん」から「お姉ちゃん」へ。135～139/183 (8月1～5日) (2009.08.14)
- ロシアとモンゴルと中国が味わえる町　135～139/183 (8月1～5日) (2009.08.13)

アーカイブ

- 2010年04月
- 2010年03月
- 2010年02月
- 2009年09月
- 2009年08月
- 2009年07月
- 2009年06月
- 2009年05月
- 2009年04月
- 2009年03月

投稿カレンダー

カテゴリー一覧

- Cambodia
- China
- India
- Japan
- Malaysia
- Nepal
- singapore
- Thailand
- Vietnam
- 旅の準備

ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

RSS 2.0

ちょっとそこまで。 > 2009年08月 アーカイブ

09.08.31

マレーシア再び。147～163/183 (8月13～ 29日)

Tweet　Check

１０カ国全てを回り終え、二度目のマレーシア。
スクーリングと再撮影のフリー期間を残すのみとなり、４ヶ月間、近くで，遠くで見守ってくださった熊倉局長のお役目もここまで。
このメンバーでの旅はおしまいです。

約２週間に渡るスクーリングとその準備。
とその息抜き。

どーん！
前半よりかなりセレクト基準をしぼってプリントしたつもりですが、やっぱりこんなになってしまいました。

ピクトリコ様、上質な用紙のご提供、本当にありがとうございます。

日本から先生方をお迎えし、個別の写真チェック。
アドバイスをいただいてはセレクト、編集を繰り返します。

そして審査。

より深いアドバイスを頂き、フリー期間の使い方も考えていきます。

さて、残る撮影期間は３週間。
もう一度撮影したい所へそれぞれ出発です。

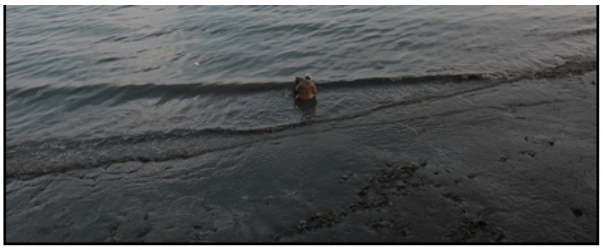
ルートはそれぞれですが、私の場合、もうここへは戻ってきません。
さようなら、とろとろ極上叉焼飯！！

カテゴリ：Malaysia
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.31 | パーマリンク | コメント (4) | トラックバック (0)

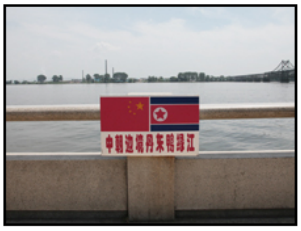
09.08.18

こちら側、あちら側。141〜144/183 (8月7〜10日)

Tweet　　Check



北の最果て満州里から鉄道を乗り継いで30時間余、遼寧省の端に位置する丹東は、鴨緑江をはさんで北朝鮮に接する国境の町。
向こう側は、北朝鮮の「特別行政区」のある新義州市だ。



４ヶ月半前に韓国から板門店ツアーに参加したので、今回がFWで二度目の北朝鮮になる。
中朝貿易も盛んなこの町は、韓国側との国境のような緊張感は全くなく、
遊覧船は特に身分証チェックもなしに誰でも乗ることが出来、船自体も川の中央を大きく越えて対岸かなり近くまで寄ってくれる。

町のあちこちに旅行会社が出している宣伝によると、中国籍ならば北朝鮮日帰り観光やパックツアーも参加可能。

川岸を歩けばあちら側でもこちら側でも、地元の人々が思い思いに水泳や釣り、洗濯、入浴をしていて、なんだかガンジス川のガートを彷彿とさせる。

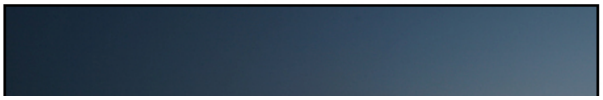
市内からローカルバスで１時間半ほどの景勝地、河口では、さらに長時間のクルーズが出ており、
対岸の集落の様子や、工場群が間近に見える。
本当にのどかで、まるでトトロの風景。
泳ぐ家族、手を振る子供、自転車に二人乗りして坂をくだっている若者。

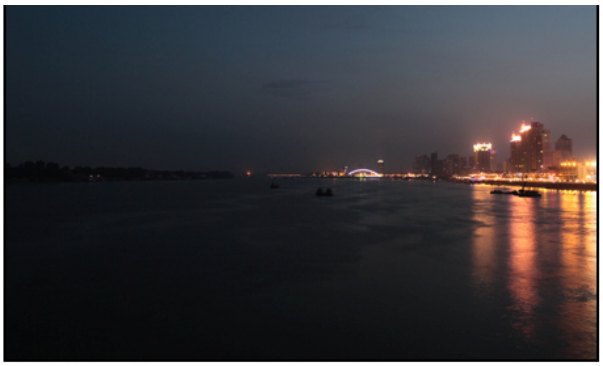
たまに船に向かって石を投げてくる人もいた。
見せ物になっている感じがするのか。ちょっと複雑な気分だ。

さて、丹東は建設ラッシュ。

ウォーターフロントは、すっかり整備されている。

「特別行政区」とは名ばかりの新義州と、林立する高層ビル、広く平らになってどこまでも伸びて行く道路と、「大都市」の形相を呈しはじめた丹東。
夜になると両者の違いはますます歴然となる。
北朝鮮←　　→中国





あちら側の住人は、対岸のこのきらびやかな夜景を、どんな思いで眺めているのだろう？？

カテゴリ：China

post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.18 | パーマリンク | コメント (5) | トラックバック (0)

09.08.14

「おばちゃん」から「お姉ちゃん」へ。135〜139/183 (8月1〜5日)

Tweet Check

他人への呼びかけ方は、国や時代や世代の考え方等が大きく影響するところで、外国語でこれをマスターするのはけっこう大変なことであります。

日本では女性は「おばさん」と呼ばれるより「お姉さん」と呼ばれる方が嬉しいに決まっていて、
もちろん私も自分ではまだまだ「お姉さん」だと思っているし、実際「おばさん」と（あえて悪意を込められた場合を除いて）呼ばれたこともないので、初めて「おばさん」と呼ばれた日にゃあさぞかしショックだろうなぁ、なんて今のところ悠長に思っているわけです。

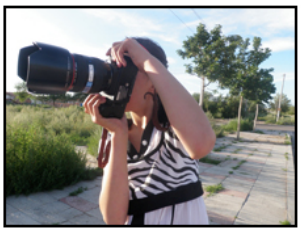
ところが中国へ行くと、５年前の私ですら、「阿姨（アーイー）」＝おばさんと呼ばれるのです。

中国の場合、絶対的な年齢で区別するのではなく、自分より親世代に近い相手に対しては、何歳であっても「おじさん」「おばさん」に当たる呼び方を使います。
なので、20歳ぐらいでも、小さい子供からは「おばさん」と呼ばれるのが一般的です。
むしろそう呼ぶことで尊敬の意味が込められるようです。
若さがもてはやされる日本と、長幼の序が比較的重んじられる中国との文化の違いなのでしょう。
初めは抵抗ありましたが、「アーイー」にぴったりの日本語がないので仕方なく「おばさん」と訳しているだけで、全く別の概念なんだ、と思えば気にならなくなります。

ちなみにこちらでは初対面の殿方から「美女（メイニュィ）」「小妹妹（シァオメイメイ）」「小姑娘（シァオグーニャン）」とよく呼ばれますが、
直訳の「美人さん」「お嬢ちゃん」「お嬢さん」と文字通り受け取って過剰反応してはいけませんね。
全部日本語の「おネエさん」「そこのカノジョ」ぐらいのニュアンスで使われていると思います。

さて、そんなことを書いたのも、
ここ満州里で、初めて「姐姐（ジエジェ）」＝お姉さんと呼ばれたからなのです。

団地の前で知り合った10歳と11歳のユートンとシンルイ。
私が日本人だと言うと、ちょうどそばを通りかかった30代ぐらいの男性が、
「日本人なんかが何やってるんだ」と不快そうに去っていき、
彼女たちも
「日本人って悪いんでしょ？」「いや、いい人もいるんじゃない？」
と小声で話し始めました。
しかし初めは警戒しながらも、話しているうちに打ち解け、
連日小学校を案内してくれたり、家に呼んでくれたり、私のカメラを気に入って放さなかったり。



年齢をきいて、私のことを最初は「阿姨」と呼んでいたのに、二日目には「やっぱり「姐姐」って呼ぶことにした！」と宣言。
同世代と見なされた、
仲間に入れてくれたってことですかね？

かくして、「おばちゃん」から「お姉ちゃん」へ。
ある意味昇格、ある意味降格ですが、少なくとも親しみを感じてくれたことは確か。

満州時代には日本人も多少住んでいたようですが、今は外国人といえばロシア人、というこの町。
私が外国人だとわかった時の反応は、いい意味でも悪い意味でも、他の町より大きかったように思います。
そんな時、「私は今、この人達の前では日本代表だ」と勝手な使命感を抱いてしまうのですが、
彼女たちを含め、少なくとも今回この町で話をした人達に対しては、嫌な印象を与えずにすんだ、とほっとしています。
彼女たちが教科書で、テレビで、どんな日本人像を見てきたのかはなんとなく想像がつきますが、
私と出会って数日間一緒に遊んだことで、少しでも違った印象を持ってくれたなら、
自分で判断する助けになったなら、と願うばかりです。

カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.14 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

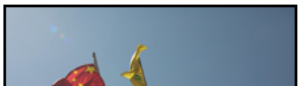
09.08.13

ロシアとモンゴルと中国が味わえる町　135〜139/183 (8月1〜5日)

Tweet　　Check

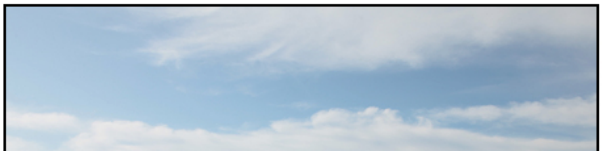
上海からは、一気に北の最果て、内モンゴル自治区の端、ロシアとの国境に位置する満州里という町へ飛んだ。

端から端まで徒歩で回れてしまう小さな町の中心部は、ほとんどの建物がヨーロッパ風で、やたらと規模がデカイ。
キリル文字の看板が至る所に見られ、ロシアからの観光客がたくさん訪れていた。



マトリョーシカがいっぱい。

中心部の住宅地はなんだかこぎれいで、"新しい町"という感じだ。



町の外れのほうにいくと、平屋が軒を連ね、空が広くなる。
この辺りも次第に新しい建物で埋め尽くされるのだろうか。

もっと外れると、さすが内モンゴル。草原、草原、草原。

そしてお約束の国境地帯。

鉄道はそのままロシアへ続いている。

欲張りな私には、小さなエリアにバラエティに富んだものがぎゅっと詰まった、なんだかお得な

感じがする町、満州里。
でも、やっぱりここも中国だった。つづく。

カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.13 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

09.08.12

上海24時間　131～135/183 (7月28日～8月1日)

Tweet　　Check

もう何度となく訪れている街、上海。
正確には覚えていないけれど、たぶん５、６回は来ているはずだ。
面白い、と思ったのは観光で来た初めの一回だけで、
あとは用事やら乗換えの都合やらで仕方なく訪れ、
どうやって空いた時間を潰そうかと困ったぐらいだ。
中国の最先端を常に走る街ではあるけれども、観光で何度も行く所ではない。

しかしカメラを持って出るとなれば、途端にここは撮影テーマの宝庫となる。
７、８年前には、タクシーの運転手が仕事を３ヶ月休むと迷子になる、という話を聞いたことがあるほど、変化のスピードが速かったこの町。
今やもう発展する所は発展し尽くしているのでは、と思っていたが、まだまだその状態は健在のようだ。

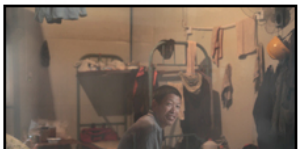
さらに、来年はここ上海で万博が行われるということもあり、あらゆる所が工事中だった。
いたるところでマスコットキャラクターも見られる。

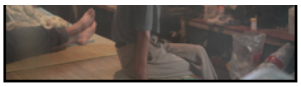
上海のシンボルとも言える東方明珠タワーの周りも工事。

黄浦両側の夜景でおなじみの外灘（バンド）の遊歩道も大規模工事で壁に囲まれ一歩も入れず。

そんな工事を含め、上海の発展を支えているのが、「民工」と呼ばれる農村出身の労働者たち。
以前は「盲流」（盲目的に都会になだれ込んで来た、という意味から）と呼ばれていた彼らは、
都市の戸籍が無いために不利な立場から逃れることが難しく、彼らの劣悪な生活環境やその子弟
の教育問題は、現代中国の深刻な社会問題の一つにもなっている。

彼らの生活場所である工事現場横のプレハブ小屋の一つに通い、民工の皆さんと親しくなった。
一部屋八畳ほどのスペースに、十数人が寝泊まりする。
出身地を聞いてみると、安徽省から来た人が多かった。





ここの職場は２ヶ月前からで、あと２、３ヶ月で工事が終わると、また別の職場に移って行くと言う。
一日働いて１００元（約１４００円）の彼らは、日本の給料事情に興味津々だった。
天気が悪いと仕事がなく、仕事の無い日はもちろん給料も無い。
年に１、２度の帰省を楽しみに懸命に働く彼らはとても陽気で、逞しかった。

こうして今日もあらゆる階層の人々を飲み込んで２４時間変化し続ける上海。

special thanks OLYMPUS

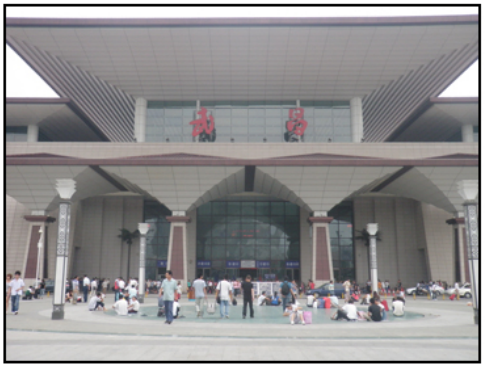
カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.12 | パーマリンク | コメント (1) | トラックバック (0)

09.08.11

初新幹線！で上海へ。　131/183 (7月28日)

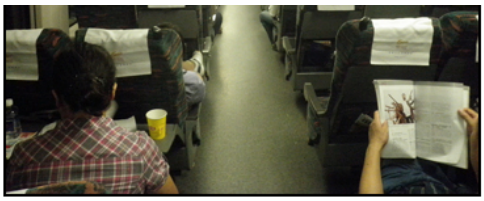
Tweet　　Check

これまた信じられないほど大きくきれいになった武漢武昌駅。



武漢ー上海間は夜行列車で10時間かけてちんたら移動する予定だったけれど、
開通したての中国版新幹線とも言える「動車組」のチケットが取れたので、
せっかくなので偵察がてら乗ってみることにした。
上海にはなんと５時間半で到着。
進化したものだ。
写真を撮ろうと思ったのに、ホーム入場開始から発車までわずか10分足らず。
なんだか慌ただしい。
始発駅なんだから、もっと余裕もたせてくれればいいのに。

乗り心地は、まあ普通。
乗客のマナーもなかなかよい。
さすがに床にヒマワリの種を食べ散らかしている客はいなかった。



乗り馴れた普通の列車と雰囲気が違うのは、その新しさよりも、
乗り合わせた他のお客さんと交流するでもなく、静かに同じ方向を向いたまま目的地へ運ばれて
行く客席のあり方のせいなのかもしれない。
イヤホンからの音楽に身を任せていると、日本にいるような気分になった。
人も、ツールもやはり都会的になればなるほど似通っていくものなのだ。

ただし。
駅が大きくなっても、チケット売り場が自動化されないのだけが、中国の不思議。

カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.11 | パーマリンク | コメント (0) | トラックバック (0)

09.08.10

武漢グルメ。126〜130/183(7月23〜27日)

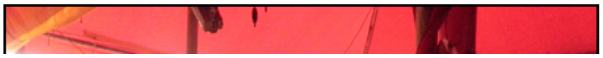
Tweet　　Check

武漢では何かと会食も多く、毎晩のように御馳走を食べ、町に出れば懐かしのB級グルメについつい手が伸び。
FWで痩せよう計画は、もう実現しそうにありません。

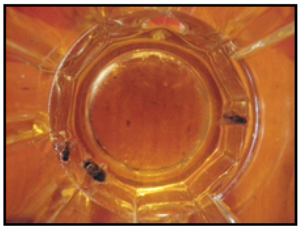
1.5元(約20円)だった大好きな武漢名物熱干麺は2.5元に値上がり…

これも名物、四季美の湯包。

虎泉の屋台は、一度積雪で潰れたらしいけど、復活。残っててよかった。



控えていたアルコールも慣れた土地ということで解禁。
蝿が３匹も落ちて来るほどおいしい生ビール笑



ちなみにご一緒した武漢滞在９年目のKさんはオリンパスユーザー。
武漢の町並みの変化を記録し続けていくおつもりだそうです。

やっぱり中華は大勢で食べるのがいちばんですね。

カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.10 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

09.08.09

昔は物を思はざりけり。126〜130/183(7月23〜27日)

Tweet　　Check

武漢。
思い出のある場所だからこそ、その再訪をどう言葉で表現していいのか、
まだ自分の中で消化出来ないでいる。

約二年間暮らしたこの町から三年ぶりに受け取ったのは、期待していた懐かしさなどではなく、
距離感とある種の焦燥感だった。

空港を降り立つと、一瞬、飛行機を乗り間違えて全然違う場所に来てしまったのではないかと疑った。
迷子になどなりようもないぐらい簡素で小さかった空港はいつの間にか首都クラスの設備と広さの第二ターミナルに取って代わられていて、きょろきょろと辺りを見回していると、あっという間に白タクのターゲットにされてしまった。やっとの思いで空港を出ると、となりの敷地にいかにも役目を終えた、というふうな古ぼけた旧ターミナルが佇んでいた。

空港からのタクシーの運転手の武漢弁は懐かしいのに、目に飛び込んでくる景色は見慣れないものばかり。

ホテル代わりに利用しようと向かった第二の母校武漢大学でも、違和感は拭えない。
緑に囲まれた留学生寮も、受付には敷地内の防犯カメラからの映像をチェックするモニターがずらりと並び、何やら物々しい雰囲気になっていた。
キャンパスの外ほどは変わっていないものの、夏休みで、校内に残っている学生は少ない。
知り合いも、ほとんど卒業してしまっている。

５年前、知り合いもおらず、言葉にも自信がない状態で一人で初めてこの地にやって来た時の心細さを思い出す。

大学の近くでよく利用していたCD屋もパン屋もなくなっているし、楽しみにしていたちょっとした計画は、ちょこちょこと諦めることになりそうだった。

どうしようもない寂しさに襲われ、到着早々Wifiの使えるスタバに直行（スタバだって私がいた頃は一軒もなかったのに、いまや5軒もあるらしい！）し、メールやらスカイプやらで知り合いに連絡をとりまくった。
が、メールアドレスや携帯番号はすぐ変わるし、
そもそもすでに武漢からいなくなっている人も多い。
中国で生活するなら必携のQQというチャット番号は、しばらくログインしないうちにアカウントを盗まれていて（よくあることなのだ）、使えない。

来ればなんとかなる、と思っていた甘さを悔やんだ。

（それでも滞在中は何人かの知人，友人、教え子に再会することはできました、それはまた後述）

働いていた外語学校も、お世話になった創設者の一人に前々から連絡をしていたのだけれど、返事が来ず。
とにかく学校はなくなっていないはずだから、直接訪ねてみることにした。

大学構内に併設された語学センターのあった場所を訪ねると、ドアには鍵がかかっている。
というか、もうだいぶ長いこと誰にも触れられていないふうだ。
まさか、と思い、門衛さんに聞いてみると、隣りの大学のキャンパス内に移動したということで、丁寧に場所を教えてくれた。

教えられた場所に行ってみると、
エレベーター付きの立派な建物に大きな文字で学校名が掲げられていた。

ガラス張りのオフィスの扉におそるおそる手をかけると、
「山本先生！！」
教え子の一人がスタッフになっていたのだ。
私が「あいうえお」から教えた彼女は、流暢に日本語を話していた。

学生はすっかり入れ替わってしまったけれど、先生やスタッフ、懐かしい顔がいくつもあった。
私が作った教材も使われていた。

学校組織は私が去ってからの３年間ですっかりシステム化されて、分校が他の省にまで進出し、計５カ所、華中地区では最大の語学学校に成長していた。
ほかの校舎でも教え子が何人かスタッフとして活躍しているようだ。

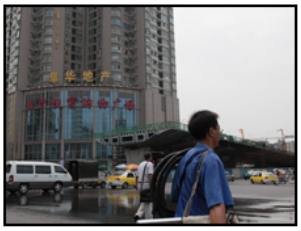
学生も教室も講師も増え、
パソコンもオフィスに一つあっただけだったのが、専門の視聴覚教室まで出来ていた。

５年前、初めて面接に行った時は、れんが造りでエアコンもない教室ひとつと窓もない小さな事務室がひとつあるだけで、冬はダウンを着込んだまま、湯たんぽを抱きしめた学生に向かって授業をしたものだ。
日本人は私一人だったし、スタッフも事務の女の子が一人と、大学の外語系卒の子が一人アシスタントをしていただけだった。
こんなふうに何人ものスタッフが制服まで着用し、忙しそうに動き回っている今の様子を見て、同じ学校だとはとても思えず、ただひたすらすごい、すごい、と感心するばかりだった。

３年前、
電動自転車の後ろに私を乗せてよろよろとバス停まで送ってくれた子先生も

電動自転車の後ろに私を乗せてまっしぐらに八幡まで送ってくれた元生も
原付で仕事の合間にお子さんの送り迎えをしていたF先生も
今回の訪問中、立派な自家用車に私を乗せてくれた。
道路も格段とよくなり、高層マンションが次々と建設され,

あちこちで地下鉄や高架道路の工事が行われている。



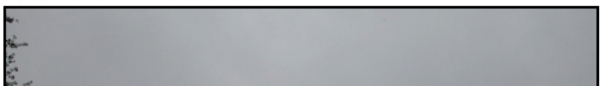
私がこの地を初めて踏んだ2004年に800万人と言われていた人口は、いまや1000万を超えているという。
中国版の新幹線も通り、もともと歴史的には水運に恵まれ、交通の要所だった場所柄もあり、
これからの中国は武漢がアツい。のかもしれない。

街は本当にキレイになった。
味気ないほどに。
人もどことなく都会的になった。

昔のままであってほしい、というのは、
そこを離れ、いつまでも回想の対象にとどめておこうとする者の勝手な要望であって、
彼らは変化を望んでいるのだということ、
この変化を誇っているのだということを、
彼らの言葉の端々から、彼らが選びとり積み重ねて来た実際の生活の様子から、感じた。

すっかり変わってしまった風景に驚きながらも、そこがかつてどんなふうだったのか、
人の容姿が、行動が、どう変わったのか、比較対象となる記憶の中の武漢はとても曖昧で、
住んでいた時はいかに自分が何も見ていなかったかということを思い知らされた。
なくなる前に、もっと見ておけば、写真におさめておけば…
なんてもったいないことをしたんだろう。

今からでも遅くはないかもしれない。
記録したい。
この変化の過程を。
この土地の激動の時代に立ち会えたのだから。



カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.09 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

09.08.03

日全食。　125/183 (7月22日)

Tweet　　Check

幸い中の不幸というか。
幸運中の不運というか。

めったにみられない天体現象を、わざわざ出かけることなく偶然にも観測可能地域にいられた、
ということは幸運であった。

が、それが成都であったことは、うーむ。
よりにもよってめったに晴れない成都。
この日もやっぱり太陽は見えず。

真っ暗にはなったので、よしとしたいところだけれど。

この翌日、到着したばかりの武漢は、完っ璧にきれいに見れた前日の日食の話で持ち切りだった。
３月の出発前に提出したスケジュールでは、この日武漢にいるはずだったのに。
諸々の事情のため、ずれた結果がこれ。

悔しい…

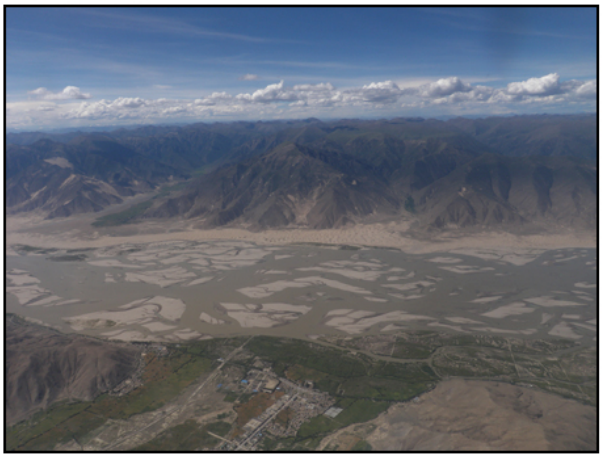
カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.03 | パーマリンク | コメント (3) | トラックバック (0)

09.08.01

5 days in Tibet　120〜124/183 (7月17〜21日)

Tweet　　Check

はい、5度目の正直。空からの絶景。
チベットです、チベット！



気付けば2週間も前の話題で申し訳ないけれど。

ラサは、思っていたよりずっと「中国」だった。

2009年７月現在、外国人はガイド同伴、専用車付き集団行動が原則。
まあ、いろいろあった所だから、仕方がない。
それはそれとして、楽しもう。

観光に来たんじゃ、ないんだけどな…。

といいながらも、せっかくなので、オプションの民族舞踊ショーにも行ってみる。

そうそう、こうやってどんどん勝手に舞台に上がり、熱唱中の歌い手さんと記念写真まで撮ってしまうのが中国流。

そして、あんなに東西に大きい国なのに、中国は全土で東の端の北京時間を使う。
経度はカトマンズのほうがよっぽど近いラサですら。
というわけで、とっても明るい２１時。

さて、人生の最高地点記録を軽々更新した、標高４９７３メートルからの景色。

ジョムソンでの慣れがあったおかげか、高山病もほぼなし。

ラサ。
不満がなかったわけじゃない。
でも、来られただけでもラッキーだったんだ。

おまけ。

こんなことも、あるよね。

カテゴリ：China
post by 山本 友来 | 日時: 2009.08.01 | パーマリンク | コメント (2) | トラックバック (0)

Copyright 2009 All rights reserved NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE
powered by OLYMPUS